
仮面都市戦線

上屋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面都市戦線

【Nコード】

N7824P

【作者名】

上屋

【あらすじ】

現代、都市の裏側では異能の怪人、『メンジン』の噂が囁かれていた。

神話や伝説を模した仮面を着用することによりメンジンは異能の力をその身に宿す。

主人公、神木録朗は恩人の死の真相を知ることが条件にメンジンを狩る組織『無貌機関』の協力者として、『カグツチ』の仮面を手にとり欲望の果て、あるいは悲しみと怒りの果てに暴走するメンジン達との戦いにその身を投じる。

その街に駆け巡るは、奇人、妖人、魔人に超人。縦横に舞い、
無尽に踊る。

——但しこの街に聖者はいない。

ブローグ1 断罪者「カグツチ」(前書き)

昔からヒーロー物が好きで思わず書いて見ました。

プロローグ1 断罪者「カグツチ」

有史以前から人は様々な仮面を作り纏ってきた。あらゆるモチーフを模し、「そうりたい」という永久の人の願いを内に込めながら。

ある仮面は万能の神を模し、

ある仮面は人を超えた英雄を模し、

ある仮面は反逆者たる悪鬼を模し、

ある仮面は大いなる天を模し、

ある仮面は豊穰なる地を模し、

そして、ある仮面は無辜なる只の人を模した。

この物語は一つの街から始まる。

断罪者の悔恨と闘いが終わり、一人の青年の絶望と悲しみが生まれた夜、物語は始まる。

これは街を守る戦いの物語。

これは青年が自らに託された意志に気付く物語。

これは父と娘の物語。

そして、都市の影に生きる「仮面」達の物語。

関東地方都市、S県O市

東京都心部より北側へ約二十から三十km程離れた場所にある巨大な地方都市。それがO市である。

市としては日本で九番目に位置する人口を抱え、世帯数約五十万、人口約百二十万という多くの人間がその街に息づいている。

始まりは一月の半ば、夜の廃ビルを二人の警察官が訪れた時、物語は動き出す。

O市B地区 午後九時四十五分F廃ビル前

「……通報によると、二人組の強盗が逃げ込んだのはこのビルだそうだな」

胸元の無線をいじりながら巡査部長、木場真次郎は状況を確認する。

「パトロール中に近くを通りがかったのは幸いでしたよ。武装は……ナイフ等を所持している様ですね。応援はどうしますか？」

二十歳程の年齢、百八センチ程の比較的長身な背丈、警官の制服越しに見えるやや細身ながら鍛えられた肉体。顔付きにはまだ少年の幼さが見える。経験不足からだろう、表情には緊張が見られるが、その眼には警官としての使命感の炎が燃えている。

木場の部下である神木「カミキ」は物陰からビルの入り口を伺う。歓楽街からわずかに離れた路地裏、人気がない場所にある三階建ての廃ビル。かつては店か何かをやっていたらしいが、今は見る影もなく荒れ果てている。二人組による凶悪な連続強盗犯事件。パトロール中に通報を受けて、新人警官の神木と教育係りである木場は犯人が目撃された廃ビルに急行、現場を確認していた。

「……応援はすでに呼んだ。あとは俺たちで犯人がビルから逃走しないように追い詰めるぞ」

木場の体躯は、背丈は神木も同じ程度だが横に並ぶと木場のほうが屈強な印象を抱かせる。精悍でありながら柔和さを感じさせる顔つき、もうすぐ五十代に届く年齢だと言うのに衰えを感じさせない眼光。鯨を連想させる落ち着いた態度。

新人警官である神木の教育係りとしてついた先輩警官の木場は、経験の浅い神木からみても警官の鏡と思える男だ。

「神木、お前は入り口で待機だ。俺が先行してビル内を探る」

「……木場さん一人ですか？ だったら俺も一緒にいったほうが」
神木の進言を強い口調で木場は制止する。

「駄目だ、ビルから飛び降りて逃げる場合も考えてお前は外から警戒しろ」

そのまま木場はビル内へと潜入していった。

——10分程の時間が経過した。木場からは応答なく応援もまだ来ない。

——応援が遅い……？

先程無線で木場に呼びかけたが反応がない。

——まさか！

背筋をはしる嫌な感覚、焦燥感が足を動かす。神木は木場の無事を確かめるべくビル内へ足を踏み入れた。

真つ暗な懐中電灯で中を照らす。散乱する大量のガラス片に、まき散らされたゴミにガラクタ。汚れた室内の壁には誰が書いたか落書きが陣取っていた。

細かな破砕音をたてて床のガラス片を踏みしめ、慎重に歩を進め

る。

——なんでこんなにガラスがあるんだ？ このビルの窓ガラス全部集めてもこの量は異常だろ。

手早く一階に人間がいなかったことを確認。二階に上がる、様子を伺いながら探索をしようと足を踏み出したその時。

「ッやつ止めるッ！止めてくれッ！助けてくれッ！」

静寂の廃ビルに突如響く絶叫。とつさに階段へ走る。最後の階、三階へ駆け上がる神木。

——木場さんの声じゃない！誰だ？犯人か？
駆け上がった先、三階のフロアを懐中電灯で照らし出す。

最初に目に入ったのは熾烈なる赤。床に転がる血にまみれた男の死体だった。

左肩口から胴体の半ばまでにぽっかりと空間が空いた男が仰向けに倒れていたのだ。左肩から左肺、心臓、大動脈を周りの骨や筋肉、皮膚、服ごとえぐり取ったように消え失せている。

周りにはおびただしくまき散らされた血液。その傷口は異様な有り様だった。

通常手持ちできる道具類でこんな人体破壊をできる刃物はチェーンスソーぐらいしかない。しかし傷口は荒れてはおらずそもそも殺すだけならこんな切り方はしなくてもいい。

いや、それ以前に空いた空間に収まるべき肉片が辺りに見当たらない。顔つき、服装、三十代程の年齢からおそらくは殺された男は犯人の一人。鼻腔を抜ける血風、吐き気と恐慌を起こしそうな意識を必死に押さえつけ、そのまま周りを懐中電灯で探る。

——木場さん…… 無事でいてくれ！

必死で願いながら辺りを見る。照らす光が今度はこちらに後ろを向けた立ち尽くす男を移した。

「おい！」

神木が声をかけたその瞬間。

スポンジを握りつぶすような乾いた音が聞こえる。

赤が舞った

一瞬華が開花する映像が神木の脳裏をよぎる。

男の頭が血と脳漿と骨片を撒き散らしまるで乾いた土塊を握り潰したように煙を上げて四散したからだ。

顎から上、脳からの制御を失い膝から崩れ落ちる先ほどまで生者だった物体。

そしてその物体の前に一人の黒コートの男が右腕を突き出し立っていた。

人の頭を握り潰したその手は赤黒い血に濡れている。

神木の懐中電灯と窓からの月明かりがコートの男の顔を照らす。その異貌に思わず神木は息を飲む。

額から生えた二本の角。

赤く光る両の眼。

そして過々しき灰色の骸骨。

ヘルメットのように頭部全体を覆う仮面でその顔を隠している。

——何なんだ…… コイツはっ！

タアンッ

乾いた音が響き、硝煙がたなびく。神木が拳銃を引き抜き天井へ空砲を射撃したのだ。

本来この状況での射撃は規定違反の疑いがある、だが。

——この男、何を腕にしこんでるんだ？

人の頭を一発で吹き飛ばすとは爆弾か、あるいは薬品の類か。相手が何かを持っている、だがそれがわからない以上確実に先手をとるしかない。拳銃をドクロへ構え叫ぶ。

「動くなっ！武器を捨てて跪けっ！」

ドクロと自分の距離は役6メートル、落ち着いて狙えばまず当てられる。

だが怪人は身じろぎせずこちらを見据える。更に警告しようとしたとき。

ドクロは急激に右へ跳躍、窓へ近づく。その動きは非常に俊敏だ。「待てっ！」

逡巡なく発砲、腕を狙う。

しかし狙い通りに右腕に着弾したはずの弾丸は音もたてず分解、四散する。

「なっ！」神木の驚愕を置き去りに、そのままドクロの怪人は三階の窓から躊躇なく飛び降りた。神木はドクロを追いかけようと慌てて階段を駆け下りる。

——なんだ、あれは！ 対弾ジャケットでも当たればめりこむんだぞ！ 弾丸が消し飛ぶなんてどういう装備なんだ？ いや、それよりも…… 木場さんは無事なのか！？

混乱する思考を必死に振り払い足を動かす。一階に到達、そのまま通ってきた入口へ向かう。

外にでようと近づくとそこに若い男が立っていてこちらを見てい

るのに気づいた。

一月の肌寒い中でラフな服装、ニコニコとした愛想の良さそうな表情。

「おい、あんた！　ここは危険だ！早く離れるんだ！」

男は動かず神木を見つめる。

「……あー、あんた木場じゃあないな。若いし。相棒の警官かい、まあ目撃されたんじゃ仕方ないっすよねえ？」

片手にもったガラス細工を顔の前に掲げた。

『ストラス』

ガラス細工が変形し頭を包み込む。

それが仮面の形をしていると神木が気づいた時には、ストラスはすでにその能力を発動させていた。

カタカタカタカタッ

足元から異音がする。懐中電灯で音の方向を照らすと、床に散らばったガラス片が大きく振動しているのが見えた。

——な…何だ？

周りに散らばるガラス片がガラス細工の男、ストラスめがけて動き出す

まるで群隊、イナゴの群のようにストラスの右腕に集合、融合し長く伸びる透明な刃へと形を変えた。

なにが起きているか全くつかめず呆然とする神木に気軽な口調で

言った。

「まっ、とりあえず死んどいて」

一瞬で距離を詰めるガラス男「ストラス。その勢いで神木へ刃を振り下ろす。だが、それは神木までには届かなかった

二人の間に飛び込んだ影が刃を腕で受け止める。刃は腕に触れた瞬間、煙をあげて砕け散った。

「お、お前は……」

状況が掴めぬまま、神木はまたも己の目を疑う。

二本の角、赤き両眼、灰の凶相、あのドクロの男がまるで神木を守るように、ストラスに立ちふさがっていた。ドクロの男はストラスを牽制しながら振り向きもせず神木に叫ぶ。

「早く逃げる！」

聞き覚えのある声に驚く神木。だがストラスはドクロの男ではなく神木を狙い始めた。

「どうしたっ？ カグツチの使い手！ そいつを早く守ってやれよ」

ドクロの男をよけ、今度は両腕にガラス片を集合、刃を構成し神木に切りかかる。距離を取ろうと下がる神木を追い回すように刃をふるうストラス。

「ッおらぁッ！」

足元に散らばっていた無数のガラス片が振動、宙に浮き始める。

ストラスの刃の動きに合わせ、羽虫の集団のようなガラス片の群れが、宙を舞う蛇を思わせる動きで飛びあがる。鋭いカーブを描きながら神木の右真横から襲いかかった。

「ッ！？」

神木はとつさに腕を眼前で組み防御、そのまま後ろへ飛ぶ。

だが顔面に走る一筋の熱、腕をすりぬけ一粒のガラス片が鼻筋を横から斬ったのだ。痛みを意に介する余裕もなく、必死に防御を固

めた腕や胴体を真横から叩きつける雨のごとく殺到する大量のガラス片が切り裂いていく。

「うああああッ——！！」

丈夫な制服のおかげで生身にはあまりダメージを受けなかったが、布地はもうボロボロの状態である。次に同じ攻撃を受けたら確実に生身に致命傷を受けだろう。

「ッハアッハアッハッ！」

サディスティックに狂った哄笑を上げるストラス。勢いよく両腕の刃を交差させた。

今度は両側からガラス片の群れが神木を挟むように飛翔し殺到する。

だが一瞬の間に飛び込んだドクロの男の両腕が円を描くように振り回される。空手でいう回し受けの動き。

それに触れると同時にガラス片の群れは神木の目前で粉末状に分解、四散し無力化される。

唯一の照明である転がった懐中電灯の明かり。それを浴びたガラスの粉末による輝きをまとい、ピタリとドクロは動きを止め、ゆっくりと構えをとる。

左肩を前に斜めに構えた上半身。

腰だめの右正拳。

前に掲げられた緩やかな左拳。

左右に開かれた足に乗る低く落とした重心。
空手に置ける中段の構え。

「……来い」

低く、暗く、静かな、それでいて確実な殺気。それは無手でありな

がらまるで真剣を構えているような鋭利な危機感。

ドクロの魔人の発する圧力に気圧されストラスの哄笑が止まった。

一拍の静寂、

しかしそれをストラスが破る。

「――ッ破！」

気合いと共にドクロの足元にガラス片が急激に集中、融合、変形し一瞬でクリスタル状のニードルを無数に形成。ドクロを串刺しにせんとニードルがせり上がる。

「震」

低い声とともにドクロの右足が強くニードル打ち下ろされる。

ド オ ン ツ

地を這う衝撃と同時に足元のニードルが粉碎、破碎されガラス粉へと還る。

それは震脚と呼ばれる通常は拳と足の踏み込みを同時にして威力を高める拳法や剣術の技法のはずだが、ドクロはその場で足のみを踏み込んだのだ。

「な、何やったんだ!？」

もはや何が起きているのか解らず止血も忘れ戦いを見守る神木。

「……貴様の能力はケイ素、即ちガラスを操る能力か」

ドクロの冷静な分析、ストラスに焦燥がみえる。

「だったらどうすんだよ、ここは俺の武器だらけだぜ!？」

今度は周囲のガラス片を自らの眼前に大量に集め始めた。 ドク

ロはストラスの攻撃を押さえるため、前へ疾走を駆ける。

ガラス片が融合、長大なクリスタル状の錐が無数に形成、さらに

それらを束ね上げ一本の巨大なニードルと化す。

詰めるドクロを迎え討つために、ストラスは渾身の一撃を放つ。

「——オオオオオオオッ！！」

ドクロ目掛け発射される巨大なニードル、しかし。

「砕」

突き出された左拳がニードルを半ばまで砕き、続いて右の拳が残り完璧に粉碎、そのままの勢いでストラスへ迫り、シャープな軌道の回し蹴りを胸目掛け叩きつける。

だがストラスも残してあったガラス片を壁状に展開し後ろに飛ぶドクロの蹴りはガラスの壁を瞬く間に粉碎、しかし蹴りの先にストラスはおらず宙を空ぶる。

蹴りの後の無防備な瞬間を狙おうとストラスは空中で刃を構える。しかしドクロの蹴り足が地面についた刹那。

「震」

再びドンツという振動。今度はドクロの足元、半径三メートルほどの範囲がドクロを中心にして、すり鉢状に一メートル程度の深さに凹む。地面を形成するコンクリートが砂のように分解したのだ。

着地の最に砂状になったコンクリートに足を取られ、すり鉢状になった地面によってすり落ちるストラス。

すり鉢の中心には終焉を待ち受ける死神のごとく、ドクロが立ち尽くす。

「ッちいいいいッ！」

「……滅」 ドクロの右拳がすり落ちるストラスを砕こうと狙いを定める。だが、

「うわあああッ！」

後ろから聞こえる若い男の絶叫が拳を止める。

「ッ！ 神木イツ！」

ドクロはとつさに後ろを振り向いた。神木の左肩にニードルと化したガラスが深々と突き刺さっている。

ドクロが粉碎されたガラスで視界が狭まっている内に、ストラスが神木の近くまで飛ばしていたのだ。

ぞぶり

直後、灰の魔人は背部に冷たい衝撃を受ける。

「殺ったぞっ！」

ドクロの背に深々とストラスの右刃が刺さっていた。

「ぬ、うっうう！」

「バ、ラ、け、ろおおっ！！！」

刃を引き抜くストラス、向き直るドクロの腹に再び刃を突き刺し捻る。

しかしドクロも左手で腹部に刺さる刃を握りしめ粉碎、

「オ、オオオオオッ！！！」

ストラスの左肩口めがけ渾身の右拳を叩き込む。

ツバシュッ

三階で聞いたあの乾いた音が響きストラスの左肩は煙をあげて崩

壊、肩から先が千切れ飛ぶ。血を撒き散らし床に落下、バウンドした。

「っづあ” あああ” ああっつー!!」

片腕を喪失した激痛に呻き、悶えるストラス、その隙をつき力尽きながらも、すり鉢状になった場所から必死にドクロが這い出た。

「こ、のお！」 神木は痛みをこらえ肩からガラスを引き抜き捨てた。そのままドクロへと駆け寄る。

「おい！、しっかりしろ！」

神木はドクロの肩をつかみ二階まで必死に担いで逃げる。激痛と出血で動けないストラスから少しでも距離と時間をかせがなければ、階段をドクロを引きずって上がる。二階のフロアに仰向けに寝かせると、すでに腹部に突き刺さった刃は抜け落ちていた。

ドクロのコートを細く千切って腹を縛り止血、更に脈拍を確認。

——…弱いな

顔を確認するために仮面に手を伸ばす。が、その手をドクロがつかむ。仮面を外されることを強く拒むように。

「なあ、あんたはもしかして……」

神木にはすでに予測がついていた。自分にとって一番聞き覚えのあるあの声をこのドクロの男が発したのだ。

観念したようにドクロの手の力が緩み離れる。ヘルメットのように頭部を覆っていた仮面が変形し、顔のみを覆うように形が変わる。怪人は自らの仮面をつかみゆつくりと持ち上げた。

薄い暗闇の中、見えるその顔は。

「……どうして、どうしてなんですか、木場さん！」

うつすらと伸びた無精ヒゲ、意志の強さを感じさせる眼差し、仮面の下には大量の出血により消耗しているが、よく見知った木場の顔があつた。

「……い、いか神木、お前を襲つたあれは……な……メンジンだ……そしてこのおれも……」

「な、なにを言ってるんですか木場さん、そんなもの子供の話す都市伝説じゃ……」

「そういうふうに関が……噂をながしてい……るんだよ、目撃されても……カモフラージュがきくようにな。ツゴホツ、ゲホツ」

木場の口から大量に血が溢れる。明らかな内臓の損傷。

「木場さん、もう喋っちゃダメだ！ 傷が……」

神木の手を木場が強く掴む。まるで最後の力を、意志を込めるように。

「神木、……よく聞け、」

「木場さんッ！」

「——聞くんだ神木ッ！ 応援がくるまで……お前はこの仮面をもつて、あのメンジンから逃げろ、俺のことはもう、いい」

「もういいって……木場さんをここに置いていけるわけじゃないじゃないですか！」「……すまなかつたな、お前を……まきこんでしまった。

俺のことはもういいんだ……いつか、いつかこうなる……そう、思っていた。神木、もしかしたらこの仮面は、お前のような男が本来持つべきものだったのかも……な……」

静かにそう呟くと目を閉じ、動きが止まる。木場の脈拍が徐々に弱くなつていくのを神木は感じた。

「木場さんッ！ 木場さんッ！」

木場の意識を取り戻すために叫びつつけるが木場からの反応がない。

「う、ああ、あ…… クソッ！ 何でだ！ 何でだよ！ 何で木場さんがッ！」

理解出来ない事態、現出した都市伝説、そして今目の前で死にゆく木場。崩壊した日常と、目の前に突き出された理不尽と、無残な死の悲しみが神木を責めさいなむ。

ジャリッ

後ろの階段から響く足音に神木の背が硬直する。

ジャリッ

床のジャリやガラスを踏み付けゆつくりと階段を上がる少しかしいだ体制の人影。

ジャリッ

ガラス細工のような仮面が見えてくるのを狙って、神木は拳銃を定め三連射を叩き込む。

しかし弾丸はその前に素早く構えられたガラスの刃に全て防がれた。木場に吹き飛ばされた左肩は止血のためだろう、溶けたガラスに包まれている。

「チッ！」

これで相手のリーチを上回る武器はなくなった。ストラスは痛みを抑えるための脳内麻薬の過剰放出のせい、それとも鎮痛のための薬物摂取でもしたのか、異常なまでに陽気に声をかけた

「おい、君い、一応警官なんだからさー、威嚇射撃くらいしといたほうがいーんじゃない？ いきなり頭に三連射はないでしょー？ 三連射は。まあしてもしなくても結果は同じだけどねえ」

――…なんで応援がくるのがこんなに遅いんだ！ 何か、何かア

イツに対抗できる武器は……

はたと、木場が持つている凶相の仮面に気がつく。仮面は薄暗闇で淡い輝きを放っていた。その輝きは、導きの光か、あるいは死へいざなう鬼火か。

——光って……いるのか？ メンジン、都市伝説、妙な力、そして仮面……

手を伸ばし仮面を掴む。迷いとわずかな希望、手に持つ物の不気味さと恐怖、そしてそこに秘める力の予感。

——この仮面を……つければ、どうなる？ ……俺も……メンジンになるのか？

そうすれば何か力を手に入れられるのか？ あのガラスの男に対抗出来る力を？

——やるしかない。出来ることをやる、死ぬのはそれからでもできる。そして、

——木場さんを……必ず助ける！

賭けるしかない。

仮面を掲げかぶる。瞬間、頭の中に声が響いた。それは会話でも語りかけでもない。まるで己が内から吹き出るが如きただ一つの名詞。

「グツ…カグ…カグツ…」

自然と唇が動きその言葉を呟く。

『カグツチ』

仮面が頭部を包み込み形を変える。

内から溢れ出る何かが、仮面から引き出される自分の何かが神木自

身を変えていく。

禍々しき双角。

赤火の両眼。

凶相の骸骨。

破滅の怪人が今再び闇に顕現する。

「ッ！？ お前、適格者なのか！」

驚愕の声を上げたストラス、だが神木は顔を下げたままじっと動かず反応が無い。

——— なんだ？ …… 能力の使い方がまだわからないのか？ だっ
たら！

勝機と見たストラスは前方へ急激に踏み込みをかけ、腰のねじれから胴体、肩、腕を伝わって全力を込めた横なぎの斬撃を打ち込む。
「ぬうつつ！」 だが迫るストラスのガラスの刃は、ゆっくりと伸ばされた神木の左手の平に触れた瞬間に崩壊する。さらに刃の中にあつた右腕を強く掴まれた。

「なっ！！」

必死にもがくが腕から手は離れない。カグツチの面の両目が赤く、暗く光りストラスを捉える。

「………… お前に」

「離せ！、離せ！、は、な、せええええええ！」

「お前にッ！木場さんは殺させないッ！」

絶叫するストラスの顔面に神木の右拳が勢いよくぶち当たる。ガ
ラスの仮面が崩壊し分解、破片を撒き散らしながら消滅していく。

「う、お、おおおおッ！」

神木は雄叫びと共に拳を振り抜いた。

ストラスであつた男は後ろへ吹き飛び、地面にぶつかり一度バウンド、壁に激しく叩きつけられそのまま動かなくなる。

仮面を失ったためか、その腕にまとったガラスは剥がれ落ちていた。

「――ハアツ、ツハアツ、ハアハツ、」

神木は手を自らの顔に伸ばす。

「う、うおおおおおおああつ！」

荒い息を整えもせず仮面を引き剥がそうともがく。やがて頭部を包む仮面が変形顔から離れ床に乾いた音を立て落ちる。

なんだ……今は、俺はメンジンに、なれたのか？……

ビルの外から甲高いサイレン音が聞こえる。

— 応援、
なの？
……

神木の意識は泥の底に沈むように失われていった。

プロローグ2 鳥男「イカロス」

関東地方、ある地方都市のごくありふれたハンバーガーショップでの少女達の会話。

「ねえ知ってる？」

「知らない」

「じゃなくてーほら、またメンジンが出たって噂」

「あー、メンジンの噂ならこないだ一つ聞いたよ、ドクロのメンジンが他のメンジンが捕まえてるって」

「えーあたしの先輩の言ってたのはドクロのメンジンは悪人を殺してるっていった」

「実はさあ京都に従姉妹いんだけどその娘が牛のメンジンの噂聞いたって」

「えー牛？なにそれ」

「牛の顔のメンジン、和服きた女性っぽかったてさ、電柱を素手でへし折るって」

「なにそれ牛頭の女性ならふつくダンでしょ」

「あと古本のメンジンが町内の平和を守ってるってうちの弟が」

「…古本？結局さーメンジンで何なんだろう？人間？宇宙人？」

「さー噂には上がるけど結局あたしたちメンジンなんて見たこと無いしね」

廃ビルでの死闘、始まりの夜より一年半後。

七月、午後十一時三十二分、〇市A区Cビル内非常階段

荒い息遣いが狭い空間を反響する。

駆け上がる足音が振動となり壁を震わせる。

ここは繁華街近くの十階立てのオフィスビル、夜にはほぼ無人となるこのビルの非常階段を走る人影。

足をもつらせながら男は階段を駆け上がる。

上はランニングシャツ下は背広のズボン、ズボンの膝はのれんのように細く裂けている。靴ははいておらず裸足だ。その走り方は何かから必死に逃げるようにも、その先に追い求める何かへ希望を持って走っているようにも見える。

はつきりと解ることはとにかく急いでいることと、その階段を駆け上がる速度は人の限界を越えていることだけだった。

ビルの階段を駆け上がれば当然のごとく屋上につく。

吸水棟とフェンス、そしてその向こうに見える夜の街の輝くネオン。水を求める動物のようにフェンスに駆け寄ろうとしたその時。

「待てよ、オッサン」

ガラスの悪そうな声が男の後ろから響く。

飢えた顔を声の方向へ向けた男は、

「……だ、誰だ？」

欲求で狂いそうな頭から辛うじて理性的な質問を絞り出す。

若い男だった。

二十代前半だろうか目つきが悪いのはおそらく面倒くさそうな顔をしているためだろう。

顔立ちはそれほど悪くは見えない。だが、鼻筋を真横一文字に横断する傷跡が強く印象に残る。背は高め百八十センチ程で髪は短く刈っている。

普通の青年だ。

この七月半ばの蒸し暑い気温に合わない、戦闘服のような対刃素

材質の黒ジャケットと黒ズボンを着ずに、角の生えたドクロの仮面さえ携えていなければ。

「あー、大切なのは俺が誰かじゃなくって、あんたが今何をしようとしているかと、あんたの顔に『何』がついているかだ」

目つきの悪い青年、神木「カミキ」緑朗「ロクロウ」の指差す先は男の顔面。フェンスの外のネオンにうつすらと照らされるその横顔。

そこには食らいつくように装着された、鶴を連想させる長いクチバシがそびえる鳥の「仮面」があった。

『神木、データ照合の結果あの仮面は以前確認されたものだ。名称はイカロス。』

資格はおそらく、
「高所からの飛翔と落下願望」
能力は「跳躍」

脚部の能力が異常に強化されている。
接近戦で蹴られれば腕を折る程度では済まんぞ』

耳の小型無線を通じてバベルの声が神木に伝わる。

「……ああ、そうかい」

うつとうしげに呟く神木にイカロスの男は叫んだ。

「俺は…… 跳びたいんだ！ 本当にそれだけなんだ！ ほつといてくれ！」

もう何時か繰り返したビルからの跳躍と着地に耐えかねたのだろ
う、裂けたズボンの裾をなびかせ、体の向きを変えフェンスへと走
ろうとする鳥の男。

うんざりしたように神木はドクロの仮面を顔の前に掲げた。

「そりゃ勝手にやりたいのは解るんだけどな」

ドクロの仮面は神木の顔にはめられる。

『カゲツチ』

静かな、眩き。

するとまるで餌に食いついたように、その頭部全体を伸びた仮面のはしの部分が包み込みヘルメットのような形態をとる。

「人に迷惑となることを進んでするべきではない。

貴様がこの三日間で、ビル屋上からの跳躍による飛び降り、及び着地の際に踏み潰した自動車二台と自販機一台は立派な器物損壊に当たる。」

……貴様の逃避、俺が破壊する」

鋭く禍々しき二本の角。

赤く、暗く光る両目。

灰色のドクロの怪人はそれまでとは明らかに違う、義務感と力に溢れた口調で告げた。

その宣告を必死に振り切りフェンスの前へ立つ男、距離を詰めるため走り寄るドクロ。

追っ手から逃れるため。

現実から跳ぶため。

己の欲求を満たすため

フェンスの向こうへ恍惚にまみれた飛跳をするため。

両足に渾身の力を込める。

ドクロの男は次の瞬間の跳躍には間一髪間に合わない。

—— ああ、これだ！これが最高の飛跳だ……

逃走のための極限の飛跳は高ければ高いほど最良である。飛翔から落下へのカタルシスはもはや射精にも似て、いやそれ以上の快楽だ。

歡喜の跳躍。

だが訪れたのは上昇ではなく落下の感覚だった。

力を放とうした瞬間本来なら保つはずの屋上の床が耐えきれず崩落、そのまま下の階へ落ちたのだ。

—— 落ちた？ 飛べない！ 跳べない！ 罨！？ なぜ！？

錯乱し混濁する意識の中、捉えたのは己の落ちてきた天井の穴。

そこから見えた夏の夜空に輝くデネヴ、ベガ、アルタイル。

そしてドクロの怪人が赤眼の眼光で軌跡を描き、自分の眼前に迫りながらその右拳を振り下ろそうとするその瞬間。

それが鳥男、イカロスが失神する最後に見た光景だった。

関東地方都市〇市。そこには都市の闇に跋扈し、異形の仮面をまとった異能の怪人の存在が囁かれていた。

彼らの目的、特徴、行動、全てに統一性はなく唯一の共通点はデザインは違っても皆頭部に仮面を付けていることのみ。

それは人が仮面をつけているのではなく。

まるで仮面が人を乗りこなすように見えた。

人々はその都市伝説の怪人達をだれかれとなく「メンジン」と呼んだ。

その存在は公に認められることなく、怪人達は都市の裏側を蠢いていた。

都市に舞うは奇人、超人、魔人に鬼人。およそあらゆる人を超えた異能がそこに息づく。

——但しこの街に聖者はいない。

興信所「シティアイ」

〇市G区シティアイ興信所午前九時半

七月の強い朝日が差し込む。

雑多な店とビルの並ぶ〇市中央よりやや離れた位置に佇む築十年の物件。神木禄郎の営む興信所はそこにある。

二階建て、一階はガレージとして開いており入口は外側の階段を登った二階についている。

カンカンと軽やかに階段を上がる足音。ドアノブが掴まれドアが勢いよく開かれる。

朝日を逆光に従えて立つ人影。平均より少し低い背丈、明るい色調のＴシャツにシャツを羽織り、タイトなジーンズを履いていた。整った顔立ちに、ショートカットの髪から覗く眼は、意志の強さと同時に猫のような可愛らしさと活発さも感じさせる。優しげでいて暖かい雰囲気をもつ少女だった。

興信所経理兼助手バイト、バベルの仮面の使い手にしてU女子校に通う高校生涯岸「サエギシ」 夏美「ナツミ」は満面の笑みで元氣よく声をあげた。

「おっはよおおございますっ！ いっやあー昨日は私の計算通りでしたね！」

どこかホコリっぱい興信所内、入り口のすぐ前にあるめったにこない依頼者用の相談スペースを挟んだ向こう側。

窓ガラスを背にした所長席で、机に足を投げ出しぐったりと座る神木「カミキ」録朗「ロクロウ」は力無く挨拶を返した。

「ああ、おはよ…… おい、あのなそりやお前は 計算するだけだからな。ていうかよ、『昨日はお楽しみでしたね』みたいにいうん

じゃねえよドヤ顔しやがって」

神木の座る所長席の左側前方に配置された助手用机にいそいそと座り始める夏美。

「そりやもう三分の二くらい私の手柄みたいなものなんだからドヤ顔ぐらいしたっていいじゃないですか！ ……それから『昨日はお楽しみでしたね』って何ですか？」

「…ゆとりが、しりたきやググレよ。いいか？ 最後に捕まえんのが一番面倒なんだぞお前コラ。毎度毎度遠くからながめてやがって！」 実際は今年で二十二才になる神木もゆとり教育経験者である。「能力の違いだから仕方ないですよ！ それからゆとりゆとり言わないで下さい！ ちゃんとしてる人はちゃんとしてるんです！ それに録朗さん一人じゃ、鳥メンジンの脚力で壊れるよう計算して床建材破壊するなんて出来ないじゃないですか！」

「それでもそういう時は年上を少しは立てんだよ！ 一人じゃだめなのはお前も同じだろうが。つつか空気よめ空気を！」

「ここには私と録朗さんしかいないんですよ。録朗さんの出した空気なんてなんでわざわざ読まなきゃいけないんですか！」

「だから年上敬えいつてんだろだがゆとりが！」

「そんなに年上敬いたければ老人ホームのボランティアにでも行ってくればいいじゃないですか。それからまたゆとりって言いましたね！」

「敬うのは俺じゃなくてお前だよ！ このゆとり小娘！」

「またゆとりって言った！」

シティアイ興信所は今日も朝から喧騒激しい。客もまだ来ていないというのに。

夏美との口論を無理やり打ち切り、神木は椅子の背もたれを倒し寝転がる。尖った目つきで天井を見上げた。夏美は昨日の鳥男の

報告書を書くためにメガネを掛け、パソコンと格闘を始める。

——組んで半年経つっのにこんなかい…

神木がカグツチの仮面のメンジンとなり秘密裏にメンジンを撃破、捕縛し、仮面を回収する機関『無貌機関』に所属し、2ヶ月間の訓練の後に実践配備として表向きは興信所の所長につき早七ヶ月。

その内パートナー役として組まされた『バベル』の仮面のメンジン、冴岸夏美と組まされて半年。

ある程度の事件をぐり抜けてはきたが彼女とはさっぱり馴れ合う機会はない

——…まあ期待する事なんぞ何もないんだがな。

「——ふわあ、ああ」

今朝方だというのにもうあくびが出る。

昨日の事件はかなり遅くだった。最近はメンジンがらみの事件が多く、おかげでゆっくり眠れない。

もっとも興信所の仕事はイマイチ暇なので昼寝で補っているのだが。

——警官だった時は、こうじゃなかったんだけど、な……あ……

神木はゆっくりと意識を微睡わせた。

指令「テレフォンコール」

シティアイ興信所

所長席 午前十二時五分

トゥルルル

トゥルルルルル

トゥルルルルルルルル

鳴り続けるコール音。それに反応してうたた寝から目覚める。頭にまとわりつく薄もやを振り払い、シティアイ興信所の所長、神木はけだるげに電話を取った。

「はい、お電話ありがとうございます。こちらシティアイ興信所。あのね、先に言つときますけどウチは基本人捜し専門だから。それ以外のことなら他の探偵社を紹介するんでそっちに…」

「ああ、もしも神木くん、私ですよ私分室長の柿本ですよ」

中年の洪さを感じさせる低めの声と、その長所を完全に打ち消す無駄に丁寧な口調を聞いて、神木は条件反射的に口調を変えた。

「……タダイマ、ルスニシテオリマス、ゴヨウノカタハ」

「ちょ、ちよつと神木くん！ムチャなタイミングで居留守使わないで！いままで普通に話してたでしょ！？」

『無貌機関』の市支部分室長である男、柿本「カキモト」 兼定「カネサダ」 年齢はおそらく四十台。

木場とガラス男、ストラスとの戦いのあと神木は気を失った。病院で眼を覚ました彼に知らされたのは先輩警官である木場 真次郎の死亡と犯人三人の死亡。事件の内容は犯人同士の仲間割れに巻き込まれた木場と神木の戦闘の末の惨劇ということだった。

犯人一味にされたガラス男はガラス片で喉を貫き自殺していたと伝えられた。神木は自分が体験したことや、明らかに遅すぎた応援今から考えれば異常にまき散らされていたガラス片、そして仮面をつけた異能の怪人メンジンについてを必死に説明した。しかしそれらは全て受け入れられず黙殺された。

神木はあのメンジンの怪人と警察組織に何か繋がりがあるのではないかと疑い、もう警察官を続けることはできなかった。

失意の内に警察を辞めてから九カ月後、神木のアパートに一人の中年の男が訪ねてきた。

グレーのスーツ、クモを思わせるスマートな体つき、細い目と穏やかな顔つき、ロマンスグレーな渋い見た目に似合わぬ、丁寧な物腰だがどこか胡散臭さを感じさせる印象。男は柿本と名乗った。柿本は仕事を紹介したいと言った。さすがに怪しさを感じ追い返そうとした神木に柿本は一枚の写真を見せる。

「これに見覚えがありますね？」

そこに写るのはあの仮面。木場、そして自分がつけたあのドクロの仮面だった。本能的な危機を感じ最初はシラを切った神木だが、柿本は「あなたは警察内でなんどもこの仮面の証言をしているはずですよ」と、さらに問い詰める。言葉に窮した神木に柿本は更にこう迫った。

「私は木場の所属していたメンジンを狩る機関、『無貌機関』の者です。

あなたをカグツチの仮面を使える適格者として、スカウトをしにきたんですよ」

神木は考えた。この機関に入ればなぜ木場が死ななければならなかったのか、誰が木場が死ぬようにあの状況を仕掛けたのか、そして、木場はメンジンとして何をしていたのか。

解るかもしれないと。

神木は柿本と交渉の末、条件を設けた。

「メンジンを捉えた成果によって木場の死の真相を段階的に知らせていくこと」

それが神木がメンジンとして闘うためにつけた報酬であり条件だった。

組織に加入後およそ二ヶ月間、柿本を教官としての仮面の能力からの戦闘スタイルの構築と戦闘訓練を受けた。

そして当時は定職に就いていなかった神木は、表向きは組織から与えられた職場、シティアイ興信所の所長となり、裏では無貌機関〇市東分室所属のメンジンとして都市の影に暴走するメンジンたちと闘うこととなった。

「いやあーでも昨日もお見事な手際でしたねえ。仮面も無事回収、物品の損壊も警備、ターゲットの生命も無事、いいことづくめですよ。おかげで隠蔽も楽で楽で」

軽快に話し出す柿本。神木は横目で夏美の状態を確認、報告書作りに飽きたのか突っ伏して寝ている。

——よし、下手にホメたの聞かれるとアイツ調子のるからな。

「まあ、冴岸のやつも上手くプランたててくれましたからね……で、あのヒモナシバンジーオヤジはどうなったんで？」

仮面に憑かれた人間は二種に分かれる。己の欲望や要求を満たすために見境無く行動する『暴走化』と、能力を意識下の本に置き自在に操る『制御化』。先日の鳥男は逃避、飛び降り願望を加速させた暴走化したメンジンである。

「まあ仮面をはがせばただの中年ですから、病院でしばらく安静にさせて、ついでに記憶も催眠かけて夢だとおもいこませましたよ。表向きは過労による軽い錯乱ということにしましてね。なんだか家庭やら仕事やらで追いつめられてたようですけど、家族もちゃんと見舞いに来てるようだし、何だか勝手に自分で自分を追いつめてい

たようでしたよ。あ、嫁さんは結構美人でしたね」

「いや、だからそこまでは聞いてないですよ」 神木はその後幾度となく木場の事件を柿本に聞いたただたがその度にはぐらかされた。結局の所は情報をネタに働かされているのが現状だ。

そのくせこの柿本という男は余計なことは報告してくる。柿本や神木たちの所属している組織、通称『無貌機関』は非公式の国家機関であり、公には認められていない存在であるメンジンを狩るために、警察とは協力関係にある。その主たる目的は仮面の封印と事件の隠蔽であるとされている。

事実、過去にメンジンを捕まえるために神木と冴岸でかなり派手なことをしたことがあるが見事に隠蔽されていた。

神木はまだメンジンとなった人を殺したことがない。だがもし殺したとしても無貌機関の隠蔽能力なら見事に隠し通すだろう。

——もし自分がメンジンとなった人を殺せば、木場さんの死のように人の死が真実から遠ざけられることになる。

その嫌悪を振り払うため神木は人を殺さぬように戦い続けていた。

「でまあ、まだ小さいその息子さんや娘さんも、その鳥オヤジにこりやまたそつくりでねえ」

「だから聞いてねえって」

「おや、そうですか？　じゃあ問題の話にはいりますね」

柿本の話術だ。話しにくい話題はどうでもいいことを話続けて相手がじれた所でサツと切り替えて話し出す。こうすることで話を拒絶する隙を与えない。

「悪いんですが鳥オヤジから1日たってないんでね、少しは休みたいんですけど」

「こちらもそのつもりでしたが事が事でしてね。今回の指令は2つです。」

実は最近市内で現れている三人組の強盗団にメンジン、それも複数

がいるという情報が入っています。あなた達にはそれらの探索と確保、無力化を願いたい。

そしてもう一つ、我らが無貌機関から脱走者が表れました。ロクシヨウという十六才の少年です。長野支部に所属していたそうですが、組織の貸し出し扱いとなっている仮面を持ったままこちらの〇市方面に逃走しています。すでに追跡のメンジン二名を撃退しているようです。が仮面の破壊のみで殺してはいないようですね。もし目撃、相対した場合は茜木くんか私へ連絡をして応援を待って下さい。くれぐれも単独で挑まないように」

「……そいつはかなりの手練れなんで？」

「ええ、かなりです。追加の追跡班ははなってますから、必要な情報はあるとで茜木くんにもたせますからそちらを見て下さい。あと一時間ほどでつくでしょう」

「ああ……茜木のやつがくるのか。ところでそのロクシヨウの脱走の原因は？」

「さあ？ まだわかりませんね。まあ、色々人間ありますから、どんな理由なんだかそれなりにあるんじゃないですか人間だから、色々ね」

——メンジンだから、だろ？

神木は内心を隠し、言葉を飲み込む。不用意に余計な事をいうのは柿本でさえしないことだ。この無貌機関ではメンジンとなった人間は基本的に利用はされても信用はされない。

「ああ、それから神木くん」

「なんすか？」

「このロクシヨウという少年実は……」

「実は？」

「結構美少年なので冴岸くんは資料の写真楽しみにしてねとお伝え……」

神木は言葉を最後まで聞かず電話を切った。

目覚まし「ショック」

神木はゆつくりと椅子から体を起こす。立ち上がり、秘書兼事務係の席でのんきに眠りこける冴岸 夏美へ近付いていった。

その年の割に幼さと無邪気さを感じる寝顔をみて、神木は優しい微笑みを浮かべると愛おしそうに。

その座席を全力で蹴り上げた。

ガタンツという音と共に椅子が揺れ、夏美が飛び起きた。

「イタツ！ なっ何するんですか、このオッサン！？」

「オッサンじゃねえよ！ 今週の電話番号お前だろうが！ 仕事の電話を俺が取ったんだぞコラ！」

夏美は寝ぼけた頭をかきながらあくびをした。

「はあ、仕事の依頼なんてうちは人探し専門なんだからほとんど来ないじゃないですか。どうせ断ったりするんなら誰が取っても同じですよ」

「興信所じゃねえよ、メンジンがらみだ。柿本のオッサンからきたんだよ」

「え、あのクモオヤジからですか？ ていうことはまたメンジン探しですか？」

「ああ、そうだよ、つうかクモオヤジって…… お前結構ヒドいだ名つけるんだな」

「資料はまた茜木さんに？」

「ああ、あと一時間位で来るらしいが」

夏美の机に置かれた彼女のケータイから、神木にはいまいちわからない最近の流行りらしい歌が流れる。

「あつ！ ネギさん？ あっはいはい、今録郎さんから聞きましたよ、あっはい」「ネギさんあと五十分くらいで来るそうです」

神木は怪訝な顔で尋ねた。

「あのよ、ネギさんって……？」

「茜木さんのあだ名ですよ」

「あいつアカネギていうと怒るだろうが『アカネキです』って」

「それは禄郎さんをシメるための言い訳にしているだけで、本当はわりとどうでもいいそうです」

「こともなげに言い放つ夏美。」

「……ああ、そうかい」

「それより禄郎さん早めにやっとかないといけない仕事があるんですよ！」

「なんだよ？」

「お茶菓子用のケーキ買ってきて、ダッシュで」

「お前がいつてこいや!!」

茜木「ウォツチャー」

無貌機関の監視官、茜木「アカネキ」晶「アキラ」は通達した時刻通り興信所に到着、ジャンケンに負けた神木が泣きながら買ってきたケーキと、夏美が入れた渾身の紅茶を来客用のソファアに座り味わっていた。

「おいしい紅茶ありがとうね、冴岸さん」

「どういたしまして」

傍らに座っていた夏美が和やかに一礼する。

「それにこのガトーショコラ……」

「それは神木さんが駅前のC店で買ってきたものです」

穏やかだった茜木の目つきが鋭くなる。

「パイが売りのあの店でこのチョコイスはあり得ないわね。趣味が悪いわぁ」

「私もそう思います」

「……オイ、お前今探り入れてから罵ったろ？」 長身でスラリとしたシルエットを包むスラックス。いかにも有能そうなキャリアウーマンといった格好。長めに伸ばし、後ろに纏められた髪と縁なしのメガネ。きれいでシャープな顔立ちにうつすらとまとった化粧が大人の色香を浮き立たせる。

夏美にとって社会に出てなつてみたい女の理想型、それが茜木晶だった。

彼女は監視役と資料配布のメールマンを兼ねて、定期的に神木達の元を訪れている。神木とは訓練時期からの付き合いで、気軽に軽口を叩き合う程度には親しくなった。

「んで、肝心の資料は？」

うつかりムダ話をさせると女二人で結託して、どう攻撃されるかわかった物ではない。神木はとつと話を進めることにした。

〇市郊外 午後一時十五分 廃屋

市住宅街から外れた郊外、経年劣化により剥がれ落ちた壁板と生い茂る雑草。打ち捨てられたその廃屋に脱走者、ロクシヨウは身を隠していた。

朽ちかけた部屋で、打ち捨てられた椅子にぐったりと座りこんでいる。十代の少年の華奢な骨格、線の細いその顔立ちと肩まである髪は少年というよりは少女のそれに近い印象を受ける。しかし憔悴した表情がその印象をかき消していた。

彼は安堵していた。自らを追ってきた追跡者二名を殺さずに撃退出来た事実。

彼は恐怖していた。このまま追跡者と戦い続ければいつか人を殺める時、あるいは自らが死ぬ時がくるかも知れないことを。そして破壊した彼らの仮面がまた別の誰かに取り憑くかもしれない事を。

しかし彼は覚悟していた。友の死を弔うため、真実を明かし、仇を討つまで戦いを止めぬことを。

仮面が無ければ、ロクシヨウは決断が出来ない、迷い続けてばかりの男だった。今でさえ、殺める覚悟をつけることが出来ない。

しかし、それでも友の死から目をそらすという決断はしない。

流れに任せ、全てを傍観する事もしたくはない。

どれほど苦しむことになっても友の無念を晴らす事を迷わない。

それがロクシヨウが、己の力で下した人生の中で数少ない決断だった。

彼は手のひらにあるある物を見つめていた。切手ほどの大きさと形、黒い何か。それをゆつくりと握りしめる。

「……〇市、無貌機関支部、本部社屋」

それが目指す場所だった。

廃屋の薄明かりに見えるその顔はすでに線の細い少年ではなく、

覚悟を決めた男の表情をしていた。

〇市 シティアイ興信所 午後一時三十分

「あら、結構いい男ですね。なんて言うかわいいい系っていうか」
写真を見た感想を素直に呟く夏美。

「でしょ？ 冴岸さん、私もそう思うのよ」

紅茶をすすりながらなぜか誇らしげにいう茜木。

——クモオヤジの予測通りだな。

内心で呟きながら神木は茜木に訪ねた。

「で、こちらの少年の能力は？」 メンジンとなった物には大別して三つの変化が訪れる。

一つ目は身体能力の数倍から十数倍の強化。

二つ目は性格の変質。

三つ目は特殊能力の付加。

一つは全ての仮面に共通して起こり、二と三はその仮面ごとに違った物になる。対メンジン戦ではこの能力を掴むのが大きなポイントになってくる。

「彼の仮面は『トツカノツルギ』 能力は『切断』よ。両手の手刀であらゆる物をその強度を無視して切断出来るわ」

「強力な直接戦闘型か…… 厄介だな。そいつのメンジンとしてのキャリアはどの位なんだ？」

茜木は資料をめくりながら答える。

「一年ほどね…… おそらくはある程度の能力の成長は起こっているでしょうね。追っ手二名を振り返り討ち出来る程、戦闘力は有るよ
うだし」

メンジンの能力は一定以上使い続けることにより成長を起こすことがある。その能力自体の強化や弱点の補強など、使い手の人間により成長の傾向は変化する。弱い能力のメンジンも成長により化けることもあるという。

「なんかうちの協力者のメンジンたちは、最初にデータベースに登録した能力から成長した場合、更新しようとか全然しないのよね。何でかしら？ お陰で連携が取りにくくて困っちゃうわ」

白々しく喋る茜木に神木は覚めた視線を返す。

「そりやお前、せっかく身につけた隠し玉をそんな所に登録するバカいないだろ」

「へえ、じゃあ、あんたにも出来たの？ 隠し玉が？」

「どうも俺は進歩が無くてね、能力がさっぱり成長せんのだ」

基本的に機関の協力者のメンジンは機関も、同僚のメンジンもけして過信はしない。ましてや全ての能力を知られるなど心臓を握られるに等しい。

自らの能力を知らせず、かつ相手の能力を掴めるように日常的に探りを入れあっているのだ。ただし、

「神木さんは全然成長してませんね。昨日の鳥男事件でもトラップとか不意打ちばかりで、新しい能力とか全然使いませんもん」

—— 黙れアホ娘……

ここにいる一人を除いて。

「あつ、私はなんだか観測精度がかなり上がりました。予測も八割くらい当たりますし、全体的にベースアップしてるみたいですね」

「流石冴岸さんね、その調子でレベルアップして、その進歩しないミドリムシ男をこき使ってやって！」

「はい！」

茜木に対する夏美の態度は愛する主人に懐く子犬を連想させる。神木に対する態度とは大違いである。

彼女の仮面、バベルの能力は『演算予測』 広域データ観測と高い演算能力によるハイレベルシミュレーション。前日の鳥男を捉え

たトラップや行動予測も彼女的能力による物である。

「まあ、とりあえずロクシヨウは別の追跡班を立てているし、あなたは強盗団の方のメンジン達を相手にしてちょうだい」

「俺たちがロクシヨウと出くわした時は、我らが茜木嬢が颯爽と駆けつけるから、てか？」

「ええ、あなたが前座で倒された後にね」

穏やかな微笑で答える茜木、しかし神木を見つめるその目は厳しい。

「柿本のオッサンから聞いたけど、あんたメンジンなんだろ？ いい加減、仮面の能力を覚えてくれないかな？」

茜木は指についたケーキのチョコを、薄い口紅のついた唇でそつと舐めとる。艶めかしく動く舌が唇から覗く。

「今すぐに機関を裏切ってくれば、イヤと言うほど教えてあげられるんだけど？」

圧力を発し氷の微笑を浮かべる茜木に気圧され、神木は視線をそらした。

——この女、目が笑ってねえよ。

えげつない探り合いにうんざりしてきた神木、それを見計らったように所長席の固定電話のコールが鳴る。

「おっと、だれだ？」

反射的に電話を取る。

『はい、こちらシティアイ興信所。先にいつときますけど家は人探し専門ですから……』

『あの、私です。日向です』

ややか細く、透き通った女性の声に神木は彼女が誰なのか気づいた。

『え？ ……ああ、こりやどうも日頃からお世話になってます！今日はどういったご用件で？』

神木はソファーにいる茜木にジェスチャーで「帰れ」と命ずる。

資料が渡された以上、長居させる理由はない。ため息をはきながら席を立つ茜木とこちらを睨む夏美を無視して神木は話を続ける。

『で、今日はどういったご用件で？ また人捜しの紹介でもあるんですか？』

電話の女性は日向「ひゅうが」楓「かえで」。数カ月ほど前から興信所に入捜しの依頼を仲介してくれている人物である。ただし、実際に神木とは会った事はなく、大抵は依頼人越しか電話を介しての会話しかない。

ともあれ見た目がどうにも胡散臭いシティアイ興信所では彼女の紹介が仕事の大半を占め、神木は彼女にどうにも頭が上がらない。

『今回は仕事の紹介ではなく、私自身が仕事を依頼したいのです』

『はあ、わかりました。それでどういったご依頼を？』

『あなたの所に依頼する以上もちろん、人捜しです。内容は直接話したいので、会って頂けませんか？』

『はい、それは構いませんが…… それでいつこちら興信所にいらつしやるんで？』

『実は私は事情があつて外に出られないので、そちらから私の方に会いに来ていただきたいのです。日程は三日後の午後六時、場所は

…… ○市中央病院で』

怪訝な表情を神木は浮かべた。

『病院、ですか？』

計画「プラン」

二日後 シティアイ興信所 午前十時三十分

「これらが強盗団一味の予測行動パターン、そしてそれに基づいた次に奴らが襲うと思われる候補地だ」

鍵を締め、カーテンで窓を隠した興信所内、部屋の中心に置いたホワイトボードの前で、夏美は〇市住宅街の地図にマーキングを始めた。

その様子を所長席で観察しながら神木は、半年の間抱いていた疑問を胸中で呟く。

——どこから見えてるんだ、こいつ？

彼女の仮面は『バベル』の仮面に覆われていた。

顔部分は古い本のページで互い違いに包まれている。鼻や顔のラインは解るが目や口に該当する穴は全く開いていない。本来ショートカットの彼女の髪は見え、まるで大量の長髪のように細く螺旋状に巻かれた紙に頭部を覆っている。

知識の塔『バベル』の仮面は本のモチーフを持つのだ。

「幸いこの候補地は全三カ所、半径一キロ内で能力の射程圏に収まる。中心で私が能力で監視すれば、犯人一味が行動を起こした場合すぐに押さえられる」

ボード前で神木に淡々と解説をするその姿は、先日 of 明るい彼女とは明らかに違う、冷淡な印象を与える。

神木は事件の重要条件の確認を始めた。

「今回は周囲で一般人が入らないように、無貌機関の職員から監視の手伝いが来るんだよね？」

「ああ、但し使われる人間は普通の人間だからな。人払いとメンジ

ンの発見と報告、それ以外には協力は期待出来んぞ」

「そりやいつもの事だろ。相手は三人組、その内二人がメンジンと
いうことだったよな。現場の破壊後や証言から、何か岩か何かを作
り出し、まとして攻撃するタイプか」

「そして二人目、鍵の開錠、というか組み上げられた機械を一瞬で
バラす能力だな。これは生物への攻撃能力は無いようだ。コイツの
能力に身体的危害を与えられた証言は無い」

気だるげに神木は相づちをうつ。今回の強盗団はあちこちで窃盗
と暴行を繰り返しているがまだ殺人はしていない。

そしてある程度の計画性があるということは、この犯人達は見境
無く動く「暴走」型ではなく、「制御」型のメンジンなのだ。

基本的に危険度はケースバイケースである。だが、制御型の方が
能力が成長した場合、後々手を焼くことになるだろう。

「で、残り一人は普通の人間か…… いや、それとも全員メンジン
になると冷静に仕事が出来なくなるからな。変身できなかったと考
えるべきか」

仮面によって性格が変質した場合、個体差はあるがほぼ個性が強
すぎる性格になる。能力や行動を自律できる制御型でも、統率のと
れた行動はそれだけ難しくなる。

「神木、どっちにせよそいつが仕事中に仮面を着けている可能性は
低い。ならば不意打ちするなり、第一目標にするなりして早めに無
力化すればいいだろう。岩のメンジンならお前の能力の相手にはな
らないだろうし、鍵バラしのメンジンは論外だ」

夏美の口調は一応は敬語を使っていた普段と違い、尊大なものに
変わっている。

——これが冴岸の内面なんだよなあ。

正直、あまり敬意を払われていないとは感じていた。しかしここ
までとなると嫌気が刺してくる。

「それで、お前は高みの見物か」

皮肉気に呟く神木にバベルは薄い胸を張り堂々と答える。

「そうだ。それがもつとも私が安全な立ち位置だからな」

夏美の普段の性格は、基本的に無気力、厭世的な神木とは対局的な、誰にでも親切なお人好し、曲がったことの嫌いな正義感の強い人格である。しかし、バベルの仮面を着けた際に変質した性格は「利己主義」己の安全と得を優先するエゴイストとなる。だが裏を返せば利を保証する限り決して裏切らないという事だ。

「ではこれでプラン解説を終えるぞ」

そう言つと彼女は自らの顔を両手で掴んだ。力を込めて仮面を引き剥がす。ズルリと糸を引くように頭から抜け落ち、シウルシウルと縮まってその手の中に収まっていく。やがて、小さな彼女の手のひらに収まる大きさの本に仮面は姿を変えた。

「あ……あ、ああ……」

何やらうめきながら夏美は自分の机へと近づいていく。どうつと力尽きたように椅子に座る。そのまま机に突つ伏し、両手で頭を抱えて何やらブツブツと呟き始めた。

「あれは私じゃないあれは私じゃないあれは私じゃない……」

この半年繰り返した光景を飽きた眼差しで眺めながら神木は語りかける。

「『仮面による性格の変質は、仮面に含まれる物ではなく、着用者の心理の一部が仮面によって引き出されることによって現れる現象である』って柿本のオッサンや茜木も言ってただろう。」

そして『仮面毎に決まっている、引き出される性格を持っている事が適格者の条件である』ともな。

あの性格もお前の一部なんだから、いいかげん慣れるよ」

夏美にとって変身後の自分の人格は、かなり嫌いな性格なのだ。

そのために変身を解く度に自己嫌悪に陥るのである。

「だったら、神木さんもちやんと慣れて下さいよ！ ていうか、神木さんの場合、メンジンの時の方が絶対性格良いですよ！」

「俺はいいかげん慣れろっていつてんだ！ 人の性格をガタガタ言うんじゃない！」

無貌機関 O市支部本社社屋 地下

柿本 兼定のモットーは「信用はしても信頼はしない」だ。

共に組織の仕事をしていく協力者のメンジンや職員達、彼らの能力、資質を正しく見極め、それを信じ、用立て、事を成す。ただ闇雲に相手を信じ、頼り切る事はしてはならない。それは自らの判断を放棄し、他人に全ての責任を被せるのと道義である。

—— もつとも、この組織自体が信用にも、信頼にも値しない所なんですがね。

コツリコツリと足音が薄暗いフロア内に響く。頑丈に造られた特殊素材の壁と床、部屋を中心では特殊強化ガラスのケースに納められたおびただしい量の仮面があつた。その仮面の群れが虚無の視線で虚空を見つめている。

このフロアに来るまでに柿本は三重のセキュリティを抜けてきた。恐らく、O市支部でこの場所に自由に出入りが出来るのは、O市支部局長の荒垣「アラガキ」と、その側近である柿本ぐらいだ。

「厳重に管理してくれるのはありがたいんですけどね」

本来、このフロアにあるとされるのは 回収された仮面の内、能力の選定をうけたタイプ。協力者となる者をメンジンとする為に保管されている、少数の仮面だけのはずなのだ。

ここまで大量の仮面を一カ所に保管するのは戦略的にも愚策である。もし、何者かから襲撃を受け仮面を強奪されればそれだけリスクは大きくなる。

——そもそも、封印されると決定した仮面は「セメントで固めて放射性廃棄物と一緒に埋め立てる」と職員たちにはそう知らせているはずなんです。

仮面は心理的限界に達した人間に取り憑き、この世界に顕現する。そして、仮面は完全に破壊されると消滅してしまう。

しかし全ての仮面は伝説や神話をモチーフとしており、人々の記憶に対応する伝説や神話が残る限り、それを存在の力として再生するのだ。

その再生がいつなのか、その時に一体誰の手に渡っているのかは現状では誰も予測できない。

仮面を完全に無力化するには、破壊せず人の手の届かない所に封印するしかない。

無貌機関の目的は仮面の回収が第一であり、着用者の生命は重視されない。この仮面の持ち主たちは、恐らくは生きている割合の方が低いだろう。

ふと柿本は見覚えのある仮面を見つけ足を止めた。仮面の左側には削り取られた指の痕がある。

柿本は生涯の中で、唯一の友だったその傷を着けた男の名を胸中で呟いた。

——木場、お前の選んだ青年は、お前とは違うやり方で、お前の守りたかった物を守ろうとしている。十年のツケ、私も払う時が来たようだ。

不惑の半ばでようやく惑う事を捨てられた事が、なぜだか無性に嬉しかった。

三人組「ターゲット」前編（前書き）

やっとバトル突入した……

三人組「ターゲット」前編

O市 B区住宅街 午後二時三十七分

「犯人一味が仕事を始めた。場所はB区三丁目三番の一戸建てだ。人質を一名取っているぞ。現場の正確な情報は『監視端末』から取れ」

バベルの声を小型無線越しに聞きながら、神木は路地裏を走り抜ける。

七月の陽気に似合わぬ対刃繊維の黒ジャケット、鉄芯を仕込んだブーツを纏い、現場への道を急ぐ。まさか張り込んで一日目で引つかかるとは思わなかった。長引かずに済むのはありがたい。ましてや今日は日向楓との約束があるのだ。

目標の住宅が見えた辺りで、こちらにふわふわと浮遊する物体が降りてきた。

白い紙で折られた手のひらサイズの折り鶴、これがバベルの飛ばした『監視端末』である。

手に取ると形がほどけ、細長く螺旋状に伸びたバベルの髪の毛に戻った。

神木はその先端を側頭部に当てる。すると髪の毛はパラパラと碎け散り、同時に現場内を監視して集められた犯人と人質の位置、状態、家の間取り等の情報が神木の脳内に流れ込んでいく。

—— 毎度便利な能力だな。

すぐさま突入に有利な入り口、人質が拘束されている、一階リビングの庭に面した窓を目指す。

まだ人質に手荒な事はせず、家の中を物色中らしい。犯人達は二名が二階、一名が一階を担当。それぞれ熱心に仕事、つまり金目の物探しに励んでいる。

——まずは一階の岩男、次に二階の面無し、最後にバラシ屋だな。

即決で順番を決めると、懷から仮面を取り出す。

灰色、赤眼、双角、神木が夢を失ったあの夜にいた禍々しき凶相。それが原初の火神の名を受けながら、燃え尽きた灰の仮面、カグツチ。

そつと仮面を見つめながら神木はこみ上げる嫌悪感と対峙する。

神木はこの仮面がどうにも好きにはなれない。道具としての愛着も湧かない。むしろ恐怖を感じる時もある。

木場の次に自分に回って来た時は、まるでこの仮面が木場からこちらに乗り換えてきたようにさえ思えた。

しかし、神木に適応する仮面はこのカグツチだけであり、メンジンと闘う為にはこの仮面を使うしかない。そして木場の死の真相にたどり着くためにも、メンジンと闘い続けなければならない。それだけが夢を失った神木の、生きる目的だ。

——コイツが破滅を呼ぶっていうなら、それでもかまわない。どうも俺は死んだ生き方以外出来ないみたいだからな。

だが、それでも。それでもなお、神木は追い求める。

——破滅と引き換えでも、俺は木場さんの死の真実を掴んでみせる。恐怖を覚悟で打ち払い、仮面を眼前に掲げる。

「カグツチッ！」

ズルリと仮面が頭部を飲み込む。

記憶はそのままに、性格、価値観が変容する例えよつの無い感覚をこらえながら、現場の隣の家の敷地に駆け込む。

周囲の家に人が居ないのは端末の情報で確認済みである。

庭に出て、目標現場との仕切りになっている高さ二メートルほどのブロック塀の前へ向かう。駆け込んだ勢いのまま、仮面により増強された身体能力で大きく跳躍。

「とうッ！」

ブロック塀を踏みしめ、さらに飛ぶ。空中で姿勢を飛び蹴りに変え、庭を飛び越えながら目標、人質のいる一階リビングの窓ガラスへカグツチは突き刺さった。

ガシャアアアッ！！

巨大な音を立てて飛び散る窓ガラスを威に介さず、カーテンを引き裂きながら、灰の鬼神がリビングに降り立つ。

本来、一般的に窓ガラスは針金で補強されているものであり、一人が全力でぶつかった程度では突き抜けないはずである。しかしカグツチは易々とこれを突き破り、室内へ侵入した。

周囲を見渡すとソファァーに隠れ、怯えた目でこちらを見つめる主婦を発見、両手が縛られている。

無事を確かめようと近づくと、カグツチの格好に気圧されたのだろう、引きつった顔で後ずさった。まあ当然の反応であり、正直慣れた。

「心配するな。俺は味方……」

言い終わらぬ内に廊下へ続くリビングのドアがけたたましい音を立て開閉。

「なんだッ！ ババア何しやがったッ！？」

二メートル近い背丈。たくましいを通り越し、暑苦しい筋肉。血管の浮いたスキンヘッドの大男が飛び込んできた。

カグツチの異形を見つけ、狼狽えながら怒鳴りだす。

「だ、誰だテメエは！ お、お前もメンジン、」

「黙れッ！」

カグツチは普段の気怠そうな様子とはまるで違う、義務感と力に満ちた声を上げた。

「人を傷つけ、金品をあさる外道に、名乗る名はないッ！」

カグツチの仮面による性格の変質、それは「暑苦しい程の正義の熱血漢」 通常の冷めた神木とは対称的な、いかなる不条理をも許さぬ熱き義人へ変わるのだ。そしてもちろん神木本人はこの性格が嫌いである。

即座にカグツチを敵と判断したスキンヘッドは仮面を掲げる。

「ウベルリッ！」

岩を無理やり切り出して作ったようなモザイク、辛うじて人面らしく見えるデザイン。変身を完了したウベルリはすぐに能力を発動、上半身が皮膚から生み出された岩に包み込まれていく。増加していく自重に床が悲鳴を上げ、わずかに陥没した。

——それがお前の能力か

平然と大腿で距離を詰めるカグツチ。構えをとらず自然体のままだ。

言葉ではなく暴力による返答をするために、石柱と化した右拳を掲げ構えるウベルリ。

ゆっくりと近づくカグツチの動きに合わせるように右腕を振り下ろす。ようやくカグツチは左腕で受けようと手を上げたが、ウベルリは構わず、その腕ごと頭を叩き潰した。

だが次の瞬間。

「……ナアッ！？」

ウベルリは驚愕の声を上げた。大質量の右腕が激突してもカグツチは吹き飛ばなかった。それどころか体勢さえ崩していない。

叩き突けた右腕は、カグツチの左腕が触れた箇所を中心に大きく

えぐれている。砂と化した岩がこぼれ、宙をまい、やがてウベルリの能力から離れたのだろう、虚空に消えていく。

カグツチの能力、それは「破壊」 両手両足、肘から先、膝から先に触れたあらゆる構造物の分子結合を解くことが出来る能力である。先程の窓への飛び蹴りや、先日 of 鳥男を捉えたトラップもこの能力で行ったのだ。

カグツチの面は炎の力ではなく、全てを原子の灰へと帰す、焼却の力なのである。

何が起こったか分からず動きが止まる、ウベルリ。カグツチがここで初めて構えをとる。

やや猫背気味の姿勢、前に構えられた両手、そしてリズムよく、力強く刻まれるステップ。

ボクシング、それがカグツチの能力を生かすために神木が選んだ戦闘スタイルだった。

数発ほどの左ジャブがライフル弾さえ受け止める岩の装甲を削り取っていく。

「ひっ、ひいいッ！」

「うかつに動くな… 中身まで削れるぞ」

カグツチは生身に触れる寸前で能力を解除、うっかり分解して致命傷を与えないよう注意する。

「この辺りだな」

ウベルリの顔面へ向かって左拳を振り上げる。とっさにガードしようとして腕を上げるウベルリ。それによって空いたボディ、岩が削れて薄くなった横っ腹に右のボディブローをえぐり込む。

「おぶおッ！」

鈍い声と共に体がくの字に曲がるウベルリ、カグツチはちょうどいい位置に降りてきた顔面を逃さない。

最も信頼していた防御が役に立たず、衝撃が絶望に変わる寸前、あご下に放たれた左右の連打、ワンツーが、ウベルリの仮面とスキーンヘッドの意識を叩き飛ばした。

三人組「ターゲット」中編

「よし、上手く気絶しているな」

カグツチは倒れたスキンヘッドの呼吸を確認、気絶していることを確認すると、ポケットから取り出したワイヤーで両手両足を縛り上げ、拘束する。

「な、なんなの？ その人死んでるの？」

主婦が震える声で尋ねる。

「……死んでる人間を縛る必要があるか？」

主婦の拘束を解き、リビングで大人しくするように指示を出す。

ウベルリの仮面を懷にしまい、次は二階にいる残り二名を片付けるために階段を上がった。

音を立てず、慎重に上がった二階、階段正面の寢室のドアが開け放たれている。そこからはこちらに背を向け、一心不乱にダンスをあさる金髪の男がいた。背後から確認するに、仮面を着けていない普通の男のほうだ。

どうやら仕事に没頭すると周りが見えなくなるタイプのようである。職人ならいいかもしれないが、強盗では致命的だ。

すぐ後ろまで近寄る。

「オイッ」

「ああ？ なんだよ」

振り向いた男の顔がカグツチの凶相を見る。驚愕の表情を浮かべるより早く、

「ウブオッ！」

左でボディ、右で側頭部にフックを打ち込み意識を飛ばす。

「あと一人か……」

これで最後の一人、バラシ屋を仕留めれば終わりだ。面無しの男

を縛り上げようと手を伸ばす。が、

「キャアアッ！」

下の階から女性の悲鳴が響く。

……しまった！

先程人質になっていた主婦の声だ。慌てて階段を下りる。

玄関を背に、廊下に細身の男がいた。複数の金属片を組み合わせたような歪な仮面をつけ、先程の主婦の首を後ろから押さえつけている。

——突入の寸前に下の階に降りていたのか！

恐らく、カグツチが侵入する直前に散策する部屋を二階から一階の部屋に変えたのだ。

「貴様、手を離せ！」

距離を詰めるカグツチ、しかしバラシ屋は主婦を盾にする。身体能力の上昇は全ての仮面共通だ。主婦の首をへし折るだけの腕力があの男にはある。

「お前は一体なんなんだよ、ドクロ野郎！ お前もメンジンか！？」

「死神、とでも言えば納得するか？ ……貴様らのように考えなく悪をなす仮面使いが、表沙汰にならないのは何故か、お前は考えた事も無いのか？」

緩慢に、しかし確実にバラシ屋との距離を近づける。

「そういった輩を裏側で片付ける存在がいるんだよ。この俺のようにな」

異能の力があり、それを制御する術があるなら、確実に一部の人間はその異能を犯罪に使う。やむを得ない場合も、やむを得る場合もその内に含みながら。

カグツチの発する圧力に押され、男は悲鳴をあげる。

「ひ、ひい、来るな、来るんじゃないやねえ！」

廊下に備え付けられた電話機を片手で持ち上げ、コードを引きちぎりながらカグツチへと投げつけた。

バラシ屋の能力が発動した電話機が、空中で回転しながら分解、部品を散弾のごとくカグツチ目掛けバラまく。

「無駄だ！」

カグツチは『破壊』の能力を発動させた右腕を振るい、部品を分解、無力化させた。粒子化した部品がきらめきながら舞い散る。

「なっ！ お前の力… 壊す能力なのか？」

完全な不利を悟り、主婦を引きずって玄関を目指す。

「来るな！ こっちに来るなガイコツ！」

「チッ…」

機関員に家を包囲させるよう、小型無線でバベルと連絡を取る。

しかし、

『おい？ 聞こえるか？』

『だから…… もしもし？ もしもし？』

どうやら他と会話をしているらしく、こちらの呼びかけに応えない。

——チッ、よりによってこんな時に、あの小娘は！

膠着する空気、だがそれを打ち壊すようにドアの外から声が響く。
「あのー、何かあったんですか？」

人の良さそうな若い男の声が投げかけられる。ドア越しに大声を聞きつけた誰かが立っているようだ。ドアの鍵は強盗の際にバラシ屋が壊してしまっている。

「ウルセエッ！ なんでもねえよ！ 入ってくんない！」

必死に止めるバラシ屋。

「助けてえ！、助けて下さい！」

必死に叫ぶ主婦。

「あー、別に何でもないから大丈夫だ！」

これ以上目撃者を出すと収集が付けにくくなるため、仕方なく力

グッチも止めに入る。

その時突然、バベルから送信が入った。男に注意を払いながら、応答を返す。

『おい、さつきは何故出なかった？』

『それどころじゃないぞ神木！ 周囲の監視をしている機関員全員から応答が途絶えた！ 生体反応があるから気絶しているだけみたいだな。先程端末から例のロクシヨウに近い人物を見かけた。かなり近くにいますぞ！ 応援は呼んだから、急いで合流して……』

カグツチは最後まで言葉を聞かなかった。

ドアがX字に切り裂かれ、蹴り割られる。飛びちる破片、差し込む昼の光、そして、それを遮るように独りの男が立っていた。

ジーンズ、Tシャツ長袖の上着、今時の若者らしい涼やかな夏服。そして全てを断ち切るように研ぎ澄まされた雰囲気をもっている。顔にはメンジンの証たる仮面、複数の刃を組み合わせて形作られた刃の仮面がそびえていた。

カグツチは知っている。その仮面の名を。この国に置いて最古のドラゴンスレイヤーとされる刃の名を。

『近くじゃない、目の前にいる。ロクシヨウだ、トツカノツルギ使いのな』

カグツチはバベルに通信を返した。

三人組「ターゲット」中編二

刃のメンジン、トツカノツルギの左右の掌から白刃が生えていた。四十センチ程の刃渡り、極限の輝きを放つ刃をだらりと下げている。

「あ、？ な、なんだ？」

もはや状況が理解出来ず、呆然とするバラシ屋、彼に対して脱走者は極めて迅速な行動を取る。

一瞬で懷に飛び込むと、最小限の動きで刃を主婦を押さえ込む左手に一閃した。

「……へっ？」

何が起ったか理解出来ず、左手に走る熱に気づき、そこを見る。床に落ちた、掌の真ん中から切断された、手。四本の指が着いている。

男の左手には親指のみ付いた半分だけの掌が残されていた。

「あつ、ああ！ 手、俺の手！」

遅れて迸る出血、反射的に自らの一部を拾おうと主婦を押しつけやがむバラシ屋、その無防備な後頭部に高く掲げられたトツカノツルギのカカトが振り下ろされる。

ミシッ！

カカトがめり込み、バラシ屋は声も出さず昏倒。

「い、いや！ もういやああ！」

おそらく現在日本で最も不幸な人間、主婦が泣きながらカグツチの方向へ逃げる。

「おい、落ち着け……」

抱き止めようと手を広げるが、

「ひいっ！ 触らないで！」

そのままカグツチを素通りし、リビングへ逃げ込んだ。

「……ちょっとヒドくないか？」

気を取り直し、改めてトツカノツルギを観察。素早い挙動と両手の白刃、あれは、

――神器「ジンギ」、やはり能力の成長が起こっているのか。

神器とは仮面の成長によって発生する道具である。多くは武器の形態を取り、仮面の特殊能力の補助や強化などの役割を担う。

神器を持つということは、メンジンとしてのキャリアと能力の成長を示しているのだ。

トツカノツルギの能力は両手の手刀による切断。おそらくあの白刃は射程距離の延長を担っている。

「……お前がロクシヨウか？」

どう見ても、茜木から渡されたデータに乗っていた仮面その物だ。しかしカグツチはあえて会話をする。時間を稼ぐことで、応援を間に合わせるためだ。

「……………」

肯定の返事として、無言のままトツカノツルギは構えを取る。

右足を前、左足を後ろに下げ重心を掛けた。

左刃を中段、右刃を上段に構え、冷ややかな殺気を放つ。

――後の先の構えか……

更に足はジリジリと後退させている。

先手にはカウンターを斬り込ませ、時間を掛ければ逃走の距離を稼げる二段構えの策。

――なるほど、冷静だ。

トツカノツルギとカグツチの距離は約五メートル程。カグツチはまず間合いを計るため、無防備に腕をだらりと下げ、大きく歩を進

める。

一步、トツカノツルギはまだ動かない。

二歩、ピクリ、と左刃が僅かに振れた。

そして三歩目、カグツチは背をかがめ、急激に踏み込む。フェイントと様子見として右ジャブを浅く打ち込む。

即座に反応したトツカノツルギは、拳を切り裂くべく左右の刃で連撃を仕掛けた。しかし、浅めの打ち込みと速い腕の戻りにより、間一髪の間隔で宙をなく。

——やはり反応が速いな、このガキ。

ここでトツカノツルギも踏み込む。右の刃による袈裟切りの斬撃を繰り出した。

——まだ遠いなッ！

カグツチはこれをガードせず、上半身を仰け反らせたスウエーと一步左足を後退させ回避。そのまま後ろに飛び、再び距離を取る。

——おっと、

ふと、カグツチは自らの左肩を見た。

——……チッ、

肩が僅かに切り裂かれている。外側の戦闘服、内側の対刃繊維のシャツを抜け、地肌が覗く。

「ここまで……警告だ……」

静かに、しかし緊張感を持ってトツカノツルギが語りかける。

「引かなければ……次は……生身を……」

それは、その少年はすでに刃と化している。刃を振るう人ではなく、少年の形をした切断する存在。故に、

「斬るッ」

その言葉は、確固とした出来うる現実を差す。

「……躰がいいのか悪いのかわからんボウスだな。いいだろう。貴様の性根、叩き壊す」

しかしカグツチもまた、引く事は無い。
破壊することにかけては、その言葉が過つことはないからだ。

三人組「ターゲット」後編（前書き）

お待たせしました。

三人組「ターゲット」後編

互いの距離は前と同じ、六メートル程。二度の同じ状態からの対峙、しかし条件は互いにそれぞれ違って来ている。

——間合いはほぼ掴んだ。後はどうズラして懐に入るかな。

緊張感、あるいは殺気という濃いタールが漂う空気。それをバタ——を切り裂くナイフのようにゆっくりとした動作で、カグツチは身を屈めた。

両手で床を力を込めて掴み、右足をたたむ。後ろに下げた左足を伸ばし、爪先を床に固定。上半身を低く構え、赤の双眼でトツカノツルギを見つめる。

いわゆる陸上競技におけるクラウチングスタート、人類の行う最も早く走る為の最初の姿勢。

「ッ——」

カグツチの取る体勢から思惑を察したトツカノツルギも相応しい対応^{カウンター}を返す《決める》ため、構えを変えた。

両刃を上段に向け、飛び込んだカグツチを完全に斬り捨てるために感覚を研ぎ澄ます。

「行くぞ、ロクショウッ！」

気合いと共に右足に力を込め、前へ飛び出す。

その一歩目が床に着いた刹那、先程のクラウチング時にこつそり『分解』の能力で削り取った床材の一部をトツカノツルギ目掛け右と左で二発、素早く投擲する。

「ツツ!!」

トツカノツルギは反射的に右の手刀で二発を切り払い、左の手刀を温存した。

カグツチは二歩目から三步目への跳躍を少し抑える。その両足に能力を発動、床に足を着けた。

原子分解により一瞬で粉状になる床材、着地の衝撃を吸収し、床材の粉末が盛大に宙を舞う。

「——っ何!？」

眼前を覆う煙幕にとっさに左の刃を振るうロクシヨウ、万物を断つ刃が音よりも速く迫る。

しかし床材をブレーキにする事で、ロクシヨウの間合いから僅かにズレた位置に停止したカグツチには届かない。

床に埋まった足を引き抜き、白刃が通り過ぎた空間を進む。

もう一度刃を振るおうと構えるトツカノツルギ、しかしその両手は動かない。

「ツ!？」

常に冷静なトツカノツルギに明らかな動揺が見えた。粉煙が収まり見える光景、そこにはカグツチの両手が彼の両刃をしっかりと掴み捉えている。

本来、装着者の意志の元、万物を斬り裂く刃がカグツチの手に掴まれたままその機能を発揮出来ずにいた。

「……俺にも隠し玉程度はあるんでな」

カグツチの成長した能力の一つ、「メンジンの能力発動の破壊」メンジンに直接触れる触れることにより、能力発動を阻害する事が出来る。しかしすでに発動した能力そのものは破壊出来ない。それ故に直接対象に触れて能力を発動するトツカノツルギのような近接型には最も有効な能力である。

しかしトツカノツルギも即座に状況を把握、白刃を分解、カゲツチの手から外す。
構え直した両腕から、まるで空中から鍛造されるように再び白刃が生える。

二人の距離は一足一刀ならぬ一拳一刀、致命打が届く互いに必殺の間合い。

そして、その致命打は頭部か胴体を狙うしかない。

「……ッ！」

無言のまま放たれる突き、袈裟斬り、胴斬りの連続斬撃。それを両手を前に構えたピーカブースタイル《いないいないばあ》からのジャブの連打で叩き落とす。

ギャリインッ ギャオッ ギャギッ

反撃のワンツー、フックのコンビネーションを右の刃で逸らし、回避。

ギャリッ ギャオッ ギャリインッ

互いの能力が干渉しあい、逸らされた力が不気味な唸りを上げ、空気を震わせた。狭い玄関のスペース内で、暴風雨のごとく力が蹂躪し、乱舞し、吹き荒れる。

——流石にやるな、ロクシヨウ。だがな……

両者は完全に拮抗している。しかし、それではロクシヨウの不利だ。

——応援が来るまではあと八分程。それまで持てば！

ギャリイン ギャリッ ギャオツ ギャリッ

決着を急ぐトツカノツルギ、放たれる連続斬撃を拳で打ち払い、スウエーで避ける。

ギャリッ ギャリッ ギャオツ ギャリイン

多彩なコンビネーションの打撃、豪雨の如きラッシュの拳撃を刃で逸らし、研ぎ澄まされた動作で交わす。

「ッ！」

無言の気合いを込め、トツカノツルギの横なぎ、左の斬撃が走る。カグツチはガードしようと右を構えた。が、刃は急激に向きを変え、腕を避ける。

——ッ！ フェイントかッ！

上方向に伸びた刃はそのまま肩へ振り下ろされた。

それを阻止すべく、右ジャブを上にも刃目掛け放つ。しかし、拳は宙を凪いだ。

——これもフェイントッ！？

上向きを打つ事によりカグツチの右腹部がから空きになる。トツカノツルギはそこへ、戻した左刃の突き、右刃の袈裟切りを同時に仕掛けた。

ゾワリッとした悪寒がカグツチの背中を疾走。袈裟切りは左拳で弾いたが、突きは防げない。

——だったらッ！

ギャリッという音と共に跳ね上がったカグツチの膝が刃を跳ね上げた。

「脚にも中和能力が!？」

両刃を外へ弾かれ、空いたトツカノツルギの胴体へ渾身の右フックが迫る。

——これでッ!!

「……おおまあえらああッ!!」

後ろから声が響く。とつさに拳を止め注意を払いつつ、トツカノツルギから離れ振り返るカグツチ。

——なんだ!？

先程降りてきた階段の上部、まだダメージが残っているのか、フラフラとた佇まいで立っている金髪の男。カグツチが二階で気絶させた男だ。

——……縛つとくべきだったッ!

後悔は先に立たない。男は激昂しながら、懷から仮面を取り出す。
——……身体検査ぐらいしときゃ良かったッ!

何度も言うが後悔は先に立たない、いやもう本当に。

「どいつもッ! こいつもッ! 燃えろ! 燃えちまえ!」

男が掲げたその仮面。見開いた目、歪んだ煙突状の口、左右非対称のデザイン。

——あれは……

『ヒオトコッ!』

仮面が金髪の頭部を包み込み、都市伝説の主が現れる。

強盗に不利な能力、ヒオトコ、「燃えちまえ」、そしてここは住宅街。

今までのデータから推測される相手の能力と最悪の結果がカグツチの脳裏をよぎる。

「させるかよッ!」

弾丸の様に飛び出すカグツチ。だがそれよりも速く、ヒオトコは煙突状の口で周りの空気を吸い尽くすように吸気。細い口元に着火用だろつか、小さな炎が揺らめく。

「くら…… あがつ!」

かん高い破砕音が響く。ヒオトコが必殺の息吹きを繰り出そうとしたその瞬間、カグツチの後ろから飛んで来た玄関先の花瓶がヒオトコの頭にぶち当たったのだ。

——ロクシヨウが投げたのか!?

走りながら一瞬後ろを確認するカグツチ。トツカノツルギは花瓶をヒオトコに投げつけると同時に、玄関から飛び出していた。

——ヤツに構っているヒマは無い。

ヒオトコは花瓶の水で口元の火が消えたためか、着火が出来ない。勢いよく階段下部に到達したカグツチは両手突きで階段を殴り、

『破壊』の能力を最大出力で発動する。

「オオオオオッ！！」

瞬く間に下部を発端にして階段がヒトコを乗せ崩れ落ちる。

「ぬおおおっ！？」

何が起こったかわからず叫ぶヒトコ。床に激突する寸前で、眼前に飛び込んだカゲツチにより、

初撃のワンツで意識の四分の一、

次撃のフックで更に四分の一、

そして最後のアッパーで残りの意識全てを吹き飛ばされた。

事後処理「アフターミーティング」(前書き)

毎度読んで下さる方どうもありがとうございます。
なにかアドバイス、質問、指摘などありましたらお気軽に感想お書き下さい。

事後処理「アフターミーティング」

「で、ロクシヨウには逃げられたと？」

強い冷房が肌を冷やす。遮光シールが張られ、比較的広い作りの黒いワゴン車。その停車中の車内で、夕方近くの弱まった日光の差し込む車外にて隠蔽工作に勤しむ無貌機関職員を尻目に、茜木はため息をつく。

助手席に座る彼女は後ろの席で並んで座る二名、神木と冴岸を軽く見やる。

二人の状態は全く対称的であり、茜木の真後ろに座る神木は開き直ったように足を開き背もたれに自堕落にもたれている。その隣の冴岸は小動物、あるいは罰を受ける子犬のようにその身をちぢこませていた。

「……まっ、そういうこった。別に俺達の任務にはロクシヨウ捕縛は入ってない。なら文句を言われる筋合いはないぜ？」

いつものごとく、うんざりとした態度で神木は返答を返す。

「あっ、あのですね、ロクシヨウを逃がしたのはさすがに私もしょうがなかったかなーっと思ったり…… ア、アハハ……」

身を強ばらせながら夏美は愛想笑いを振りまく。

「まあ、別に私としてもロクシヨウを捕縛または撃破出来なかった件を攻めるつもりはないわ」

「だったらこの件はこれで終いだ。あとの隠蔽はお前らの……」

「待ちなさいよ」

茜木は座席の位置をずらしドンツと後ろに下げる。神木の足が座席の隙間に挟まれ固定された。

「イツテッ！」

そのまま背もたれの角度を倒し、神木を挟みながら寄りかかる。さながら人間座椅子のような体制の神木がうめきながら叫んだ。

「……何すんだよ！ だけ、暑苦しいんだよ！」

「あら、人によっちゃこういうのお金払ってもやられたいって人もいるんだけど？」

「だったらもつと趣味のあるヤツにやってやれ！ お前の下敷きなんぞ金を貰ってもごめんだ」

茜木の容姿は少なくとも十人ならほぼ十人が振り向く美人。しかも色気のあるキャリアウーマンというそういう趣味なら是非踏みたいタイプだろう。しかしあいにく神木にはその趣味は無い。加えて茜木が特殊な趣味向けのサービス精神を発揮しているわけでは無いことも勘ずいている。

空いたスペースで長い足を組み、寝目上げるように茜木は背もたれから神木を見つめる。

まるで雌豹を思わせる仕草に何故か傍らの夏美がゴクリと喉を鳴らした。

「神木、あんたおもしろい能力がついたのねえ、『能力発動の破壊』だっけ？」

「冴岸イ……」

横目で神木は夏美を睨みつけるが、夏美は光速の仕草で目を逸らす。

「……冴岸、お前こいつにまた報告したのか？」

「だ、だって茜木さんから出来る限り報告してって言われてるんです！ 神木さんだってそういうこと茜木さんにちゃんと知らないから……」

夏美はあたふたとあわてて、ばつの悪さを繕うように弁明する。

——まだコイツは機関がマトモに信用できるもんじゃないとわからないのか……

内心で舌打ちをしつつも、神木は茜木に向き直った。

「……悪いが自分の安全に関わるんでね。成長した能力を全部バラすなんざやりたくはねえんだよ」

「あんたの安全がどうのとかはどうでもいいのよ。要は能力を掴んでないと指示出すほうがやりにくいっー話なの。」

……あんまり非協力的な態度が目立つともっと上に報告して対処しなきゃいけないるんだけどね！

まあ、うちは年中人手不足だし、あんまりそういう手はやりたくないんだけど？」

より圧力の増した茜木の視線、そこから逃げるように神木は身をよじらせた。

「わかったよ、めんどくえな！」

「そう、わかれば結構よ。わかればね」

押さえつけていた座席を引き、位置を戻す。圧迫から解放された神木が苦々しくため息を吐いた。

「ハア、……ところでよ。話が変わるがあのロクシヨウはなんで現

場の家に入って来たんだ？ アイツ逃亡中だろう」

「あつ、神木さんそれ私も気になってたんですよ。周りの機関の人を無力化して逃げるかと思ったら現場に行っちゃうんですよ」

「んー、そりゃあんだ…… 助けに来たんじゃない？ 報告じゃ主婦の『助けて』を聞いて入って来たんでしょ」

そのままな返答に眉根を寄せる神木、夏美もいまいち釈然としな
い表情を見せる。

「なんでも話によるとロクシヨウくん、向こうの長野じゃ礼儀正しくて、親切な少年で評判だったそうよ」

「そんなやつが組織裏切って逃亡中？ 何やったんだいったい……」
「…… ほんとはいい人だったりとかな？」

夏美のぼつりとした呟きを無視し、神木は話を続ける。

「ま、お人好しだかなんだかわからんがどうでもいい。それから三人組の仮面、ちゃんと回収出来てるよな？」

「ええ、その辺は抜かりなく。ちよつと亀裂入ってた仮面もあったわよ？ もう少し丁寧をお願いしたいわ」

「生きるか死ぬかなんでな、多少の損傷は勘弁しろ」

通常、メンジンを生かしてなおかつ仮面を回収するのは難しい。
意識を失えば仮面は自動的に外れるが、確実に行動を奪える頭部への攻撃は仮面も破壊してしまう公算も高い。

結果的には腹部など臓器を破壊する攻撃なら仮面を傷つけないが、行動不能になるよう威力を上げればそれだけ着用者の生命は保証出来ない。

安全に仮面を回収するなら頭部以外に致命傷となる攻撃を与えるのが最も手堅いのだ。

「そうねえ、あんたは毎回生かして捉えてるもんね。……でも、あの三人組はただの犯罪者よ。暴走した一般人じゃないの。前にも言っただけさ。」

——とつと殺して仮面回収すればいいんじゃない？」

ギリギリ、とまるで音がするように空気が固まり急激に冷却。鋭角な視線で神木は茜木を刺す。

夏美はオロオロと判断をつきかねた表情で窓際に身をよせ、様子をうかがった。

「人の仕事に無駄な口出しは止めて貰おうか。仮面の回収が出来ている内は、俺のやり方を通してもらう」

「前から思ってたけど、ずいぶん着用者の生命にこだわるのねえ。」

——前に警察官だったころのなごりかしら？ あそこは被疑者の安全な確保にこだわる……」

「——茜木イツー!!」

車内で神木の声が響く。夏美はビクリと体を震わせるが、茜木は振り向きもせず動揺も見えない。

「俺の過去をどうこう言うのは止める！ それから、死体の処理がやりたいのか死体が見たいのか知らんがだったら自分でカタをつける。俺はそんな物を背負う気はないんだよ！ 第一、お前だって表向きは警察のキャリアだろうが」

茜木晶の表向きの顔は警察のキャリア官僚である。最も彼女はS県警にあるとされる自分の机には座るところか、拝んだ事さえ無いと笑っていたが。結局のところ彼女の裏の顔であり本職でもあるのは「無貌機関」というこの場所だ。

「ふうん、ま、そういうなら死なない程度にその主義だか信念だかでやってみたら？」

うかつに死なれると追加人員確保やら死亡理由のでっち上げとか面倒だから」

あくまでも冷淡に、感情を露わにする神木と対称的な茜木。後ろ向きのその姿からは冷氣さえ感じられる。

「あ、そうそう、夏美さん？」

「はっ、はいイ！」

不穏な二人を不安げに見つめていた夏美がうわずった声で返事をした。

「この前渡した拳銃、ええとナンプだっけ。ちゃんと持ってる？」

「え、ええ、この中に……」

夏美は腰に付けたポシェットを前に出した。

「使い方はこの前教えた通り、危ないと思う前に急所を迷わず撃ちなさい。仮面は気にしなくていいから、自分の安全を考えるのよ？」

……本当はリボルバーじゃなくて、私と同じグロック辺りを用意したかったんだけどめんなさいね」

冷静に考えると予知が出来ない限り無理なことを、淡々としかし優しげに喋る茜木。後ろを振り向き、今度は神木を見据える。

「神木、あんたはフォワード、彼女はバックアップ。彼女に危機が向く時点であんたのミスなのよ。」

殺す殺さない以前にまずこの娘を守る事を肝に命じなさい。

……それさえ出来ない甲斐性無しなら私があんたに引導渡すわ」

先程とは違う、はつきりとした苛立ちと怒りの感情を向ける。

「茜木、お前が何にこだわってるか知らないが、俺は……」

「か、神木さん！」

夏美が携帯を片手に突如大声を上げる。

「……なんだ冴岸？」

「時間！ そろそろ日向さんと会う時間ですよ！ 間に合わなくなっちゃいます！」

「なっ！ マジかよ！ 茜木、この辺で邪魔するぞ」

「さよなら、ネギさん！」

「あ、ちよつとあんた……」

茜木の言葉を振り払い、夏美と共に車を出る。車内とは大違いな外の熱気に嫌気が差しながらアスファルトを踏みしめた。

「冴岸、時間は？ 走ったほうが良さそうか？」

病院の方向へ歩きながら神木は問いかける。

「あ、大丈夫です。実は時間は三十分ぐらい早めにいったんですよ」

「……なんでそんなこと」

「あの、茜木さんは私たちの事を心配して言っていると思うんです。確かにいざとなったら殺すことも覚悟しなきゃいけないんでしょうけど……」

それでもあたしは、神木さんの『殺さない』やり方は大切だと思うんです」

「冴岸、お前……」

今まで色々と不仲だったりはしたが、どこか根のようなところで
は意外と神木と夏美は近いのかもしれない。

——少なくとも、人を殺めるか否かの分水嶺では。

「——ま、少し時間はあるからな。涼める所にでもいくか？ アイ
スぐらいなら奢ってやらんでも……」

「え、奢ってくれるんですか！？ じゃああたしスイーツカンブリ
アのギガンティック・パフェ！」

「お前それ食いきつたら一万進呈のヤツだろ……ッ！？」

懐からだした携帯を見た神木が一瞬固まる。

「冴岸い…… お前面会の時間何時か覚えてるか？」

「え？ やつだなあー、神木さん六時半に決まって……」

「バカ、六時だよ！ 今五時五十分だ！ 走れ！」

二人で青い顔をしながらその場を駆け出そうとする。

——……ん？ なんだ？

しかし神木は現場の住宅家に入る奇妙は集団に目を止めた。

人数は五人、その内三人は大中小といった背丈と普段着の男達。
もう一人は中肉中背の純白の背広の男。但し、

——けっただいな、おい。

その口元のみが露出した頭部は白い包帯に包まれている。

そして他の四人とは別の意味で目立つ最後の一人。

柔らかなウェーブのかかった金髪、夏空を思わせる蒼穹色の着物。優しげな美人の女性、その立ち居振る舞いはたおやかな桔梗を思わせる。

——…へえ、今時いるもんだな、あんな和服美人……

「ちょっと！ 神木さん、何見とれてるんですか！？」

思わず足を止めた神木を引っ張り、夏美達は現場を去った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7824p/>

仮面都市戦線

2011年11月14日19時12分発行